# 保育の見直し ―その一

加藤いづみ

## あたりまえの保育への疑問

一九七〇年代後半の頃、若い保育者から、「幼稚園の保育ってこれでいいのかしら?」という素朴な疑問があがりました。

毎朝の朝礼、〝天国と地獄〟のレコードをかけて子どもを機械的に整列させ、〝お片づけの歌〟をピアノでジャンジャン鳴らして子どもに片づけを促す保育……、子どもを保育室に集めて、保育者が製作や歌などを一方的に教える保育……など、当たり前のようにやり続けられてきた保育で、本当に子どもは育つの?という疑問がふくれあがっていきました。

その頃の事をM先生は、「運動会の前になると、登園後すぐ園庭に集まってプラカードの前に整列し、行

進の曲がかかると入場行進の練習をしていました。先生全員が笛を持っていて、子どもをきびきびとうごかすために、笛でぴっぴと号令をしていたんですよ。次は体操の練習をして、その後は〝花笠おどり〟の練習をして……と、くる日もくる日も同じ練習がつづきます。そんなある日、一人の子が滑り台の方にいってしまいました。早く呼びもどさなくっちゃ、と思っていたのに、その子があんまり嬉しそうに滑っていて、何も言えなくなってしまった。〜練習をしない子が問題児なのか？　それとも、はみだざざるを得ない保育に問題があるのか？　ということを感じ、どうしてもつれもどせなかった」と語っています。

やがて、若い保育者たちの声に共感する輪は少しずつ園全体に広がり、職員全体で、行事中心・保育者主導の保育への疑問が話し合われるようになりました。そして職員の話し合いも初めは日々の保育や行事の打ち合わせが主だったのが、「自分たちの保育」について各自の意見を交わす事が増え、その後の「子ども理解」のための園内研修につながっていきました。

## 子ども主体の保育を探して

しかし、今の保育への疑問は限りなく広がっていくものの、では、どうしたら良いのかということについては皆目見当がつかないという状態でした。とにかく自分達だけではどうにもならず、藁をもつかみたい思いでした。

それが、お茶の水女子大学「幼児教育現職研究」への参加の引き金になり、一九七七年四月から全職員で、毎週火曜日の保育後に横浜から東京へ研修に出掛けていきました。

チューターの先生や大ベテランの先生の話から知的

な刺激を総身にあび、自分たちの疑問を先生方に次々と質問していき、新しい保育への思いをあらたに募らせました。

そして、この現職研究会で聞いた理想の保育の在り方と、自分の毎日の保育との隔たりに圧倒されながらも、職員が一丸となった本格的な保育の見直しが始まったのです。

## 子ども主体の保育のはじまり
### ―保育環境を変える・保育が変わる

そして翌年一九七八年から、現職研で園のチューターをしてくださった大戸美也子先生をスーパーバイザーに迎えました。大戸先生の指導のもとに、いよいよ、聞いたり見たりしてきた子ども主体の保育を自分たちで実際にすすめることになりました。

保育室の大半を占めていた机の半分が除去され、遊具が増やされました。積み木、ブロックなどの室内遊具を購入し、ままごとコーナーの充実をはかり、廃物製作のコーナーも新たにつくりました。そして、特別の場合を除いて一斉活動をなくし、それまで一斉活動の前の三十分だけだった遊びの時間を大幅にのばし、子どもの遊びの空間と時間が大きく変化しました。

そして、やや肥大化した諸行事も思い切って縮小化することにしました。たとえば、保護者に見せることを主体に考えられていた運動会から、まず第一に子どもが楽しむことを主体にした運動会に改善。学年ごとに大きなテーマに基づいて行なわれてきた作品展も生活展という名称に改め、内容も一人一人の子どもの日常の作品を展示し、また〝作品〟という形で伝えにくい成長の姿は写真で展示することにしました。

行事が縮小されることで、子どもたちはそれまで行事のために歪められていた生活から少しずつ解放され、じっくり遊びに取り組めるようになり、保育者もそれまで行事の準備に追われていた時間を、子どもたちのよりよい成長のために考え合うことに費やせるようになりました。

この時期、保育者たちは、とにかく子どもと遊ぼうという意気込みで無我夢中でした。気づいたら保育者が中心になってその周りを大勢の子どもが取り巻いていて、よく大戸先生から〝だんご保育だね〟と笑われたこともありました。また、子どもの要求を受け入れすぎてしまって、保育者が子どもに振り回されていたりということもしばしばでした。

けれども、子どもとの密着した生活の中からは、これまで気づかなかった子どもたちの姿を新たに発見することができました。「子どもは自ら育つ力を持っている」事や「子どもの力を信じる」という言葉を実感し、子どもの自発的な活動の中に、色々な工夫があることがみえてくると共に、改めて遊びのとらえ方の難しさを痛感していきました。

## 遊びには筋がある
### ―園内研修の始まり

大戸先生を迎えて始まった定期的な園内研修では、『子どもの遊びへの理解』を深めることがテーマになりました。そこで、今までの形式的な保育記録を改め、保育者はそれぞれ自分のクラスの子どもたちの遊びの経過を「保育実践記録」に記録していくことになりました。そして、毎日書きためた記録は、遊び別に整理していきました。

自分たちの見たものや、発見したものを記録に残し、それを定期的に読み返し研修していく中で、私たちは日々子どもたちが展開している何気ない活動が「単なる遊び」では片づけられない豊かな内容を持っていることを知り、一つ一つの発見が驚きと興奮に満ちたものになっていきました。

記録は当初、廃物製作・積み木といった目に見えやすい活動がほとんどでしたが、少しずつ「一見混沌と見える遊び」にも目がむくようになっていきました。一例として「追いつ追われつ活動」の研修をあげておきます。

## 「追いつ」「追われつ」活動

子ども達が走り回っている姿は、園のあちらこちらで見かける光景です。追い掛けては捕まえ、また逃げる……といった単純なあそびに注目したのは、四歳児の「ドラキュラあそび」の記録からでした。ドラキュラになった子が保育者を追い掛け、まわりの子もまきこみながら、遊びつづけた活動です。

> 血を吸おうと、おそいかかってくるドラキュラ役の子ども。
> ドラキュラをやっつけようと毒ケーキ作戦を必死に考える保育者。
> どんどん仲間を増やしていくドラキュラ軍団。
> 追いつめられて、とうとう逃げ場を失って血を吸われてしまう保育者…

この記録をもとにして研修を進めるうちに、追いつ追われつのやりとりが、単なる身体的運動ではなく、「追う」「追われる」という二つの役割をとりあう「対話」の原理の働いている、一つのまとまりを持った活動であることがわかったのです。

ただ走り回っているようにみえる行動も詳しく見ると、そこには一定の構造のようなものが見えてきます。『大人にとってわかりにくい遊びにも意味がある』～その発見は、保育者の遊びを見る眼を大きく変えていきました。

大戸先生との研修会を通して、「あそびには筋がある」ことや、「毎日同じ事をしてあそんでいる」ように見えても日々新しい変化があることなど、子どもの

行動からいろいろなメッセージを読み取ることができるようになってきました（注）。

## 子ども主体の保育の充実にむけて

八十年代は、記録を通して子どもの理解の園内研修活動を軌道に乗せていくと共に、それまで慣例化していたものを新たに見直し、環境整備を次々と行なっていきました。

・教材の設定の見直し―クレヨンなどの個人持ちの教材を共用にし（一九八四年）共同で使う中での育ちを大切にする。

・制服の廃止―園のシンボルでもあった「制服」「制帽」「外あそび用の赤白帽」を一九八九年より廃止し、自由な服装にする。

・環境整備―三歳児保育室、どろんこ広場の新設。外あそび用の大きい砂場の増設。アスレチックの設置など、あそび環境の整備をおこなう。

## 人間関係を育む保育をめざして

九十年代になり、社会の大きな変化と共に、幼稚園に入園してくる子どもの行動に変化がみられるようになってきました。たとえば、「他の子が近づくだけでぶつ」「友達に話し掛けられても、無表情で何も答えない」「相手の子が泣いていてもたたき続ける」というように、人との付き合い方が希薄な子どもたちが増え、保育者は子どもとのかかわり方にとまどいつつ、試行錯誤を重ね、新たな保育の見直しが始まりました。

そこで、一九九一年から四年にわたって、子どもがどのように友達に近づき交わりあうのかを、具体的な子どもの様子を一つ一つ振り返り記録し、その実態を捉えるための園内研修を行いました。その結果、園における子ども達の人間関係のスタイルには、次の五種四十四タイプあることがわかりました。

①「存在」　ひとりで砂で遊ぶ等、子どもが集団状況

にひとりでいる状態（八タイプ）。

②「発見」　ままごとのそばで友達をじっと見る等の、子どもが自分の周辺に関心を持って観察している状態（五タイプ）。

③「接近」　保育者が何か始めるとそばにきて見ている等の、子どもが関心を持った周辺の事象に近寄る行動（三タイプ）。

④「参入」　「追いかけっこをしている子のおしりをポンとたたき逃げる」等の、子どもの人との関わりはじめ（十七タイプ）。

⑤「仲間遊び」　他者との参入を経て、仲間遊びを展開している状態（十一タイプ）。

この研修を通して、子どもたちの多様な人とのかかわり方を発見したことで、それぞれの子どもの人間関係の発達にそった援助を、意識的に考えていけるようになりました。

今まで見過ごしがちだった「人との関わりはじめの子どもの様々な様子」を知ったことで、それまで人との関わりがスムーズにできない子に「仲間に入れてって言えばいいのよ」という儀礼的な言葉に頼り、パターン化していた保育者の援助を反省することができました。また、同じ物を身につけたり、同じ行動をとるというように、単なるまねっこととして受けとめていた行為が、仲間との関わりにつながっていたことや、「うちに遊びにきていいよ」「手伝ってあげようか？」というように相手の気持ちを和らげる言動もスムーズに仲間遊びにかかわるための力になっていること等も知り、保育者の関わりを多様化していくことが子ども一人一人の実態に即した援助につながることを考えさせられました。

## 二十年の園内研修を振り返って

「子ども主体の保育」をめざしてすすめてきた園内研修。初めの十年は保育を一八〇度転換するという大改革だったと言えます。従って周囲、特に保護者からの

理解を得るまでには、大変な苦労があったことをつけ加えておきます。

子どもを理解し育んでいくための研修は、私たち保育者自身の物の見方、考え方の根本をも育てていってくれた事を感じます。二〇〇〇年という世紀の節目を迎えている今、子どもをとりまく生活もまた大きく変化してきています。その時代の流れの中で、継承していかなければならないことと共に、新たな保育の見直しも求められてきています。次回は、社会状況が激変していった九十年代の保育の変遷を中心にお話ししていきたいと思います。

（横浜学園付属元町幼稚園）

**注**

この時期に研修をした遊び　廃物製作・追いつ追われつ・積み木・ままごと等

日本保育学会にて研究発表

一九八一年第三十四回大会「追いつ追われつ活動の構造に関する研究」「4才児の積み木遊びの構造に関する研究」

一九八二年第三十五回大会「保育における交互作用の研究その1　研究の意義」「同その2　研究資料としての観察法の提案」「同その3　追いつ追われつ活動の場合」「同その4　ごっこあそびの場合」「同その5　片付けの場合」

一九八三年第三十六回大会「4才児の動物遊びの生態」「ガンダムごっこに関する研究Ⅰ」「ガンダムごっこに関する研究Ⅱ」

三十六回大会において、日本保育学会倉橋賞受賞

**参考文献**

『保育の見直し』　大戸美也子／横浜学園付属元町幼稚園　フレーベル館

『保育ライブシリーズNo.4横浜学園付属元町幼稚園の40年』　大戸美也子／横浜学園付属元町幼稚園